

「身近に新聞のある学校生活」を実現することで広がる学びの可能性に関する一考察 ～「私たちの新聞記事」を創り、活用するNIE実践の提案～

出雲市立荘原小学校

1 はじめに

新学習指導要領総則に、情報活用能力育成のために各種の統計資料に加え「新聞」等の適切な活用を図ることが盛り込まれた。高学年の国語科では読解力を伸ばすための指導、社会科では新聞などの産業について学ぶために新聞などの各種資料で調べるよう明記している。新聞を児童にとって魅力ある教材としていかに活用するかが、今後より一層問われてくる。

2 主題設定の理由

「NIE(Newspaper in Education)とは、学校などで新聞を教材として活用する取組である」と新聞協会では説明している。学習指導要領の改訂において、児童の読解力を育成するため、様々な資料に触れさせることが示された。新聞記事は、文字と写真、統計資料等を組み合わせて社会的事象を分かりやすく解説したひとまとまりの情報である。扱いによっては読解力を育成するための優れた素材となりうる。しかし、小学校段階の児童にとって馴染みの少ない素材であるため、魅力ある教材にするために資料の加工や提示の工夫等、解決すべき諸課題がある。

また、これまでの学力調査結果等から、本校の児童には問題文を的確に読み取り、求められている解を作り出すための諸能力に課題があることが明らかになった。そこで、学校研究を教科指導法に関する研究から、読解力育成のための授業改善へと変更するとともに、新聞を児童の身近に整え、生活や学習の中に新聞記事を活用する場面を取り入れることで、児童の思考力や表現力を高め、主体的な学習態度を培っていくNIE実践の可能性を追求することにした。

3 研究の仮説

本実践では、取組の重点を次のように設定した。

仮説(1)「児童が新聞を手にする」機会の充実

学校生活における学習や生活の場の中で、児童が直接新聞を手にする機会の充実を図ったり、抵抗

感なく新聞記事を活用できる教材活用場を用意したりすれば、新聞記事を身近な教材として受け止める素地を児童に形成することができるであろう。

- ① 学校生活における新聞との触れ合いの場の工夫
- ② 学習教材としての活用の工夫

仮説(2)「学校情報」掲載の新聞記事の充実

学校の特色ある教育活動や児童の学習の様子を積極的に報道機関へ情報提供し、新聞記事掲載へつなげれば、新聞記事に対する児童の親近感を高めることができるであろう。

- ① 特色ある教育活動と情報発信
- ② 記事情報を該当学年児童へ還元

仮説(3)「私たちの新聞記事」を活用した実践の充実

自校の教育活動掲載記事を活用した授業実践を実施すれば、児童は意欲的に記事内容を読み取り、ねらいを効果的に達成する自主教材としての新聞記事を作成することができるであろう。

- ① 第5学年社会科の教材開発事例
- 以下、この3つの仮説にしたがって検証していく。

4 研究の実際

(1) 事例1「児童が新聞を手にする」機会の充実

① 学校生活における新聞との触れ合いの場の工夫

多くの児童は、新聞に触れる経験が乏しいことからくる「新聞は難しい」「新聞は大人が読むもの(子どもの読み物ではない)」といった疎遠感をもっている。本実践を進める上での基盤的取組として、まず「新聞を手にする」という児童と



【写真① 新聞当番の活動】

新聞との出会いの機会を大切にしていかなければならないと感じた。

最初に手がけたのは、「新聞コーナー」の設置であ

る。中学年教室フロア（2階）にある図書室前に子ども新聞3紙を、高学年教室フロア（3階）に一般紙（月替わりで常時2〜3紙）を配備した。学習指導における活用はもちろんであるが、朝の時間や休憩時間などに自由に読むことができる。低学年児童も、図書室に立ち寄る際に子ども新聞を手にする姿が見られるようになった。

さらに、新聞コーナーへの新聞補充は高学年児童に当番制で行わせることにした。新聞補充を輪番制にすることにより、普段新聞を手にする機会の少ない児童にとっても、当番活動をしながら新聞を開き記事に目を落とす機会になると考えたからである。

② 学習教材としての活用の工夫

平成28年度から開始したNIEの取組であったが、2年次からは本格的に学力向上の取組とも関連付けを行い、全校体制での取組へと発展させていった。

○全校朝学習メニューへ記事読み取り活動を導入

B新聞社が毎週水曜日に配信する「ワークシート通信」を、水曜日の朝学習メニューとして全校で取組を始めた。低・中・高学年向けの3種類のシート（子ども新聞の記事とそれに関する問いで構成された学習シート）は、学年によっては家庭学習にも活用され、新聞記事に定期的に触れる機会が充実した。

○各学年での学習指導における新聞活用の広がり

各学年の教科等の学習指導では、次の取組を行った。

- ・図工「新聞紙の大へんしん」（1年）
素材としての新聞紙の手触りを味わい表現する
- ・国語「どうぶつ赤ちゃん」（2年）
動物を取り上げた「ワークシート通信」の活用
- ・朝の会で新聞記事の「紹介コーナー」（中学年）
自分の選んだ記事とコメントを紹介する
- ・新聞の形式による学習のまとめ（各学年）
- ・新聞社出前授業「新聞の読み方」の実施（5年）
新聞記者による新聞の読み方指導の実施
- ・5年社会科学習における新聞活用事例
単元「これからの工業生産とわたしたち」
「トランプ大統領TPP離脱発言」記事で導入
単元「情報化した社会とわたしたちの生活」
「市平和祈念式典」記事の比較読みで導入
- ・6年総合「平和学習」のまとめを新聞にて発信
地元紙に特集ページを出し児童作文等を掲載
これらの取組を通じて、児童は新聞に対して次のよ

うな感想をもつようになってきた。

- ・読むことがだんだん楽しくなってきた。
- ・学校の新聞コーナーで新聞を読むことが多くなった。
- ・祖母の家で新聞をもらい読むようになった。
- ・家で毎日少しずつ新聞を読むようになった。
- ・今はスポーツ欄以外にも【写真② 社会科学習の様子から】読むようになった。
- ・記事を読んで、今後のことを予想したくなった。



（2）事例2「学校情報」掲載の新聞記事の充実

各学年の学習指導等の様々な場面で、児童が新聞記事に興味関心をもって関わる機会の充実を図ってきた。しかし、児童が自然と目を輝かせ、新聞記事を自ら手にするための工夫がさらに必要であると感じた。なぜなら、新聞に掲載されている記事は、児童にとってやはり「他人事」であるからである。

① 特色ある教育活動と情報発信

- ・自分のような普通の人でも記事になると知った。
- ・意外と地域の人（こと）がたくさん出ていることを知った。

という児童の感想がある。これは、本校の取組が新聞掲載され、それを読んだ際のものである。この感想が示すように、児童は自分や自分と関わりの深い内容に対しては、周囲からの誘いがなくとも記事に強い関心を寄せることがわかる。本校の特色ある教育活動やNIE実践を、報道機関へ情報提供を積極的に行うことを通して、地域住民への情報発信とともに、児童が新聞に対して興味関心をより一層高めるための手立てとして重視していくことにした。各年度の掲載記事数は以下のとおりである。

年度	掲載記事数 (のべ)	備考
H27	2【話題数 2】	実践前年度
H28	17【話題数13】	NIE実践1年目
H29	20【話題数14】	NIE実践2年目

- 情報発信の取組を強化することにより、児童からは
- ・テレビや新聞は遠い存在だと思っていたが、身近なものだと考えが変わった。
 - ・世の中の出来事が私達と関係していると思った。
 - ・新聞は身近な人の事も取り上げられていて、身近な

ものだと思った。

という感想も聞かれるようになってきた。学校発の情報発信は、学校運営上欠かせない取組でもある。児童が新聞記事をより身近なものに受け止められる効果もあり、今後も重視していきたい取組のひとつである。

② 記事情報を該当学年児童へ還元

本校の取組が掲載された場合は、掲載日に全教職員と該当学年児童全員に配付し、各学級で読み合っで感想を伝え合う時間を設けるようにしている。地道であるが、この取組が前掲した児童の感想へつながり、また家庭でも新聞記事に関する内容が話題になる等、新聞を手にする機会の広がりにつながると考えている。

(3) 事例3「私の新聞記事」を活用した実践の充実

① 第5学年社会科の教材開発事例をもとに

平成29年度に実施した第5学年を対象とする「情報化した社会と私たちの生活」(全9時間)の授業実践を通して、児童の新聞記事への興味関心を高め、思考を深める自主教材としての新聞記事のあり方について考えてみたい。

本単元の概要は以下の指導計画のとおりである。

指導計画 (全9時間)

時	主な学習活動	資料, 体験等
①	<p>○2つの新聞記事を比較し、共通点と相違点を調べる。</p> <p>【学習問題】 記者(新聞社)は新聞をどのようにつくり、わたしたちは情報をどのように選択し、生かしていく必要があるのだろうか。</p> <p>○情報を伝える側と受け取る側の二つの側面から学習問題をつくっていく。 ○学習問題について予想し、学習計画を立てる。</p>	<p>・市平和記念式典の新聞記事 「A社新聞記事」 2017.8.7付 「B社新聞記事」 2017.8.7付</p>
②	○新聞に目を通し、載っている情報の種類や、新聞の特徴について調べる。	・当日の新聞 (児童数分)
③	○新聞記者による出前授業、製作センター見学に向けて質問をつくる。	・新聞記者による出前授業
④	○どのように新聞がつくられるのかについて質問したり、話を聞いたりする。	・新聞製作センター見学
⑤		
⑥		
⑦	○新聞社の発信者としての責任をまとめる。 ○新聞とその他のメディアを比較し、その特性について考える。(正確さ, 詳しさ,	・出前授業や製作センターで話を聞いた際

え る⑧	<p>分かりやすさ, 素早さ, 持ち運びのしやすさなど)</p> <p>○メディアに対して, 受信者である私たちはどのように情報を選択し, 生かしていくべきか, 自分の主張を組み立てる。</p>	のメモ
表 現⑨	○学習したことを新聞にまとめる。	・新聞の型

○「つかむ・見通す」場面 (第1時)

単元導入において、新聞記事の比較読みの活動を取り入れ、「記者の取材意図が違えば出来上がる記事に違いが生まれること」を児童に理解させたいと考えた。その際、まず記事内容が短時間で読み取れることが大前提であり、取り上げる新聞記事の選定基準を次のように設定した。

- ・児童に身近な題材が取り上げられていること
- ・およその記事内容の背景が理解できること
- ・学習のねらいが記事の読み取りで達成できるもの

これらの基準に照らし、本校の6年生児童が4月から取り組んできた平和学習のまとめを発表した「出雲市戦没者追悼・平和祈念式典」の様子を伝えるA新聞とB新聞の記事を教材として取り上げることにした。A新聞は、式典当日取材によって作成された記事である。式典で今回初めて長崎の被爆体験者による講話が行われたことを中心に記事内容を構成した。一方、B新聞は以前から本校の取組を取材してきており、作文発表内容にあった大阪在住の学童疎開体験者と本校児童との交流を中心に記事内容を構成した。

記事を比較し、「記事の内容が違う」「取材されている人が違う」「文章の量が違う」「写真の数が違う」などの



【写真③ 記事の比較読みの様子】

「どちらも6年生のことが書いてある」「使われている写真で同じものもある」「式典のことは両方同じ」などの共通点が見つかった。相違点については、「記者一人一人の考えや思いが違うからではないか」という予想も自然と生まれた。そして2社の記事の比較読みによって生まれた予想をもとに、記事を作った記者に確認したいとことをまとめ、学習問題づくりへつなげてい

くことができた。

○「調べる」場面（第2時～第6時）

第3時では、第1時で扱ったB新聞の記事を実際に書いたS記者と松江支局長に来校いただき、「新聞がどのように作られるのか」について、児童の質問によって解き明かしていく展開で授業を行った。S記者には、主に「本校児童と学童疎開体験者との交流を追った平和学習についての記事」がどのような思いや経緯



で出来上がったのか、児童の質問を通して一つ一つ丁寧に解説いただいた。また、伝える上で何を大切にしているかによって記事に違いが出てくること、

取材で得た事実をもとに記事を書いているからこそ記者が違って共通する部分があることなど、情報を伝える側として大切にしていることについて具体的に学ぶことができた。この学びにより得られた成果は、

- 自分たちが読み取りをした記事を実際に書いた記者と対面して学習したことで、記者の仕事に興味をもったり、これからの学習への意欲が高まったりした。
- 新聞について知りたいことや疑問に思ったことを直接質問する機会を設けたことで、児童は自分が問題を解決しているという気持ちをもつことができた。
- 質問の答えを記者から直接聞くことで、説得力や満足感を感じることができた。

さらに4～6時では、校区内にある地元紙の製作センターへ見学を行うことで、新聞がどのように出来上がり私たちの手元へ届けられるのかを具体的に学ぶことができた。

「調べる」場面までの学習を通じて、児童は次のような気づきをもつことができた。

- ・2つの新聞記事を読み比べてみると、同じ出来事を取材していても全然内容が違うことに驚いた。
- ・記者の思いにより、同じ出来事を扱う記事でも違ってくるのが分かった。
- ・新聞づくりには多くの工程があり、たくさんの方が関わっていることを初めて知った。
- ・この単元を通してもっと新聞を読みたくなった。

5 研究成果と課題

2年間の実践成果として次の点を挙げられる。

(1) 学力調査に見られる読解力の状況

本実践の成果によると断定することはできないが、実践前後の全国学力調査「活用B問題」の全国平均との差は、下表のとおりである。顕著な変化はとらえられず、今後の取組課題とした。

区分	H27	H29	備考
国語B	100	99	ほぼ全国平均値と同じ(変化なし)
算数B	89	98	ほぼ全国平均値へ(改善傾向)

※ 全国平均を100としたときの本校の正答率

(2) 新聞を手にする機会充実の状況

児童が、日常生活においてどの程度新聞を手に入れているのか。全国学習状況質問紙調査の結果によれば、次のとおりやや改善傾向がみられるようになった。

質問項目		H27	H29
【児童質問紙】 新聞を読んでいますか (%)	本校	23.6	36.2
	国	23.7	21.0
	県	25.2	23.8

※ 「ほぼ毎日読む」と「週1～3回程度読む」の回答合計

(3) N I E実践のための環境整備状況

2年間の実践により、学年別「ワークシート通信」のファイル化、各学年のN I E実践資料データ蓄積、教材利用できる新聞記事ストック、社会見学・記者派遣事業手続きに関する情報等、N I E実践を継続していくために必要な資料や情報等を整備することができた。

一方で、その他の実践上の課題は次の点である。

- ・教材となりうる新聞記事のストックの充実
- ・N I E実践に係る校内研修機会の充実

6 おわりに

N I E実践は、新聞を教材として活用する取組である。したがって、活用を進めるための推進力は「指導者の教育的ニーズ」であり、また「活用の場を積極的・意図的に作っていく姿勢」である。本校の取組は、既存の新聞記事を活用するにとどまることなく、新聞社と連携を進める中で「私たちの新聞記事」を積極的に創り出し、それを活用するところにその特色を見出すことができる。それは、本校を進めるN I E実践が、全校体制でかつ学校教育活動全体で取り組む活動として位置付けることを前提としたからである。今後もより一層の充実を図っていきたい。